

04の講義内容

原稿用紙七枚半(三〇〇〇字)の文章の書き方

萩原 義雄

原稿用紙に記述する文字は、実にシンプルなものである。だが、この原稿用紙に記載した文章を「整理」し「割り付け」して公開するとすると、図絵やグラフ・表等とのバランスが求められていく。実際に、八〇〇字で書き綴った文章でも自由自在に引き延ばすことができるのが常なのだから……。

ここで原稿用紙に記述する文章内容について検討しておくこと、「随筆」「小説」「論文」「報告書」「日記」「手紙」「広告文」「宣伝文」「企画文」と多種に及ぶこととなる。記述方法や文体等も大いに異なってくるが、書くという行為の基本には変わりない。この時、升目を埋めていくタイプと升目に拘ることなく、思うが儘に書いていくタイプとがあるようだ。あなた自身がどちらのタイプなのかを知っておくことも大事な要素となっていく。その方法として、失敗した原稿用紙をすぐに丸めて捨てるか否かをまずここで問うておくことにしよう。あなたは、どちらですか？

「Yes」・失敗した原稿用紙を丸めてポイと捨てる」 「No」

浪費癖

「Yes」・裏の白紙箇所を利用する」 「No」

格闘癖

一 研究者

「Yes」・失敗した文章を修正する」 「No」

一 几帳面

一 合理家

修正方法は……※1 「Yes」・文言を援用する」 「No」

※1、「見せ消し」「紙貼り」「修正液塗りつぶし」……。

“捨てずに活かす”引用方式を学ぶ

「頑固な数」の話をしよう。「数字の排列が、演算してもなかなか変わらない数」「42857」、これを二倍すると「285714」、三倍すると「428571」となり、数字の排列をみると、同じ数字をただ順送りに循環して並べた数字となっていることに気づかされる。同様に、五倍しても、六倍してもこの性質は変わらず、まさに「頑固な数」そのものである。ところが、七倍するとたちまち「999999」と変貌してしまうから妙な数である。八倍以上の数をかけるとどうなのか、「積の下六桁に、積から下六桁を除いた数字を足すと、「頑固な数」が「再登場する」という人はこれを「数字の魔術」と表現する。

「七」の魔力、「数字には純粹に理論的な法則からくる不思議な性質だけではなく、人の出会いの長い歴史の間に生まれた、心理的な陰影もまつわりついている」と云う。欧米では、歴史上の事件に絡む数字を、特定の数字との因縁から克明に分析していく「ニューメロロジー(Numerology)」という数の持つ一種の秘力に古来人々が注目してきた。たとえば、「七」の数は、「七不思議」「七つの大罪」「七つの海」「北斗七星」、オクターブの「七音」等々、人の識別の指標として表現されてきた。しかし、なぜ「七」の数字にこうした人間的な絡み合いが存在するのか学術研究の立場で探求する試みも現実には見られるのである。人に「七情」喜・怒・哀・懼・愛・悪・欲「禮記」があるように、私たちの感覚器官「視覚・聴覚・嗅覚・味覚・觸覚」の五感に「山勘」という第六感が働き、これを超えた超感覚ともいえるべき「第七感」までを最大の感覚と見なすことに基づくことを検証しようとする

試みが臨床医学の立場でもなされている。

この譬諭譚にこそ、「七枚半」の原稿用紙増幅の私の心の意図が込められていることを学んで欲しいのだ。四〇〇字詰め原稿用紙七枚は、二八〇〇文字、これに予備文字数二〇〇〇文字を最初から確保する。この二〇〇〇字は、二八〇〇〇字の凝縮した要旨文だと思えば良からう。

では、どのようにに原稿の文字数を引き延ばしていくのかを考えてみよう。前回作成してきた八〇〇〇字の「流露」した文章そのものが常に基盤対象となっていることを認識しておかねばならない。

その意味からも、八〇〇〇字文章のストックリストの構築を心がけておくことも忘れては成るまい。最初に取り上げた、1「随筆」2「小説」3「論文」4「報告書」5「日記」6「手紙」7「広告文」8「9「宣伝文」10「企画文」と多種に及ぶ文章形態一つ一つに自らがチャレンジすべきことを付加しておく。ここで1から10の文章形態を二大別すると、学校で書く（小児のための）文章Ⅱ「自己の経験や体験を通して得た主観的・感覚的な文章」と実社会で書く（大人のための）文章Ⅱ「情報を適確に伝える文章・他人を説得する文章・自分の考えの正しさを証明する文章」になっていることに気づいて欲しい。1から10の文章がどちらに位置するものかをここでそれぞれ確認しておくのではないか。

取材すること

「書くこと」の内容の事柄を記すときに取材体験もないというのは、実に不都合となる。書くための「素材集め」と云えば、聞こえも良からうが、実際に予備知識を片手に情報収集しても素材自体が定番過ぎて妙趣に欠けることもよくある話だ。「慥か、あのネタ（素材）、別のテレビ番組で遣っていたよなあ！」型の素材では、誰も面白くも無からう。個性がないからだ。「素材」は同じでも人類は常に新たなる発見を求めてきた。最初の文明が構築され、最盛期を迎えると同時に今度は老廃が襲う。古い文明が粉々になって飛散すると、再び新たな文明が初生声を上げ、生き芽生えていく。自然界の法則に私たち人も連動していることを理會することである。この自然界の「倒木」という現象をあなたは目にしたことがありますか？ 老木が倒れ、倒れた木は朽ち果て土に帰り、やがて新たな木の芽がこの上に誕生する。私たちの日常用いることは、そして文章もこれに等価であることを知ることになろう。

自身の良き理會者は、現実社会の人以上に古えの書物のなかに生きている人のことばにあると『徒然草』の兼好法師は教えてくれている。これを実践した人物には、作家司馬遼太郎がいる。第二、第三の兼好法師をまずは自らが目指そうではないか。

実在するものごとの現象を自らが知る。すなわち、「現実との突き合わせ」を私は奨めたい。擬似体験は、危険を伴わないから何度でも失敗することが許される。だが、現実直視の現場においては、その人の一挙一動がものを云う世界でもある。時には寸時の失敗も許されないからだ。こうして、初めから終わりまで、語り手や演ずる者の「流露」が「昇華」されていく光景は実に美しい。見事な調和が漂い続け、凡てが一つになるからだ。「もう一步」という欲張る、頑張る自己の意識を大切にし、日々文筆修行に励んでほしい。

ひとりが今日から一〇〇〇字の文章を私に提出することが可能であることを伝えておこう。この提出文章をひとつひとつ読んで、どこを削除し補填するか、文章づくりのキャッチボールを私と続けて行こう！。

《余話》パ lindrom (Palindrome) = A man, a canal Panama. =

夜を徹してスイスの冬の想い出を友と語る「回文」…「雪舞い もの白し 野も今消ゆ」「スイス！ 君と見き スイス！」「酔え！ 燃えよ！」「夜も疾く明く 友よ」

「月のもと清しといえは冬の夜の夕ゆふばえいとしよき友の来つ『毛吹草』所収